iii) 最盛期の7月の海霧出現率は，極東域における1～2月の500mb高度偏差の負域中心の位置と良好な正相関があるので，第7表の回帰線方式によりかなり正確に予想することが出来る．

iv) 8月は7月より精度はおちるが，7月と同様に第7表の回帰線方程式により予想出来る．

なお，資料のある期間が短いので，今後長い間にわたって成り立っかどうか不安な点もないではない．しかし5，6月については相当の物理的根拠が認められ，また特に7月については広範囲の海域についてかなり良い相関があるので，少なくともここしばらくはこの予想方法が適用出来るものと考えられる．

それから，北海道に近い海区の海霧については，親潮寒流の消長のみならず釧路沖に進出する切離暖水塊の動静とも密接な関係があり，海況および気象条件が複雑な割に資料の年数が短いため，長期予想は簡単でないが，今後の努力目標とせねばならない．

おわりに，日ごろご指導いただいている函館海洋気象台の前台長安井善一氏，現台長淵本一氏，海上気象課長河村四朗氏ならびにいろいろ協力をいただいた海上気象課同僚諸氏に厚くお礼申し上げる．

参考文献

(1) 荻原昕二ほか，1944：空気の移流と海霧の発生，海霧観測報告技萃（北部149部隊調査第13号），P．36

(2) 函館海洋気象台海上気象課，1959：1959年北海道近海海霧調査報告，函館海洋気象台海上気象報告第3巻2号P．6など

(3) 気象庁予報部，1963：寒候期予報参考資料，季節予報資料〔季第389号〕P．27

篠原氏の『巻雲と絹雲』を読む

高　橋　喜　彦*

気象庁は，理想のもとに物事を具体的に考え，そして実行する政府機関である．今回の雲形名の一部改訂もこのような立場から行われたもので，関係者の苦労を察したい．つぎに，私が学校教育のあるパンフレットに「雲形名の一部改訂について」と題して書いた一文を載せて，諸氏のご討論を待つ．

気象庁では，雲形種類のうち巻雲，巻雲，巻積雲，および巻層雲をそれぞれ絹雲，絹積雲，および絹層雲に改め，昭和40年1月1日から用いることになった（昭和39年12月16日気象庁告示第6号，および関連した諸規程の改正による）．

〔解説〕 巻雲は学名cirrusの和名である．このcirrus（ラテン語）は，curl などと英訳されるとおり，巻き毛などの意味をもつ．ところで，巻雲などの巻はケンと読み慣わされてきた．しかし，現行の当用漢字としての巻の音読はカンであり，ケンはないので，文部省の学術用語委員会や日本気象学会でずいぶん前から検討されていたが，最終決定に至らないままでいた．今回，気象庁では部内外の各関係者の意見を参考にして，上記の改正に踏み切った．巻をカンと読み改めずに，これに絹（ケン）という字を当て，発音はもとのままとしたことは，ことばの本質を大切にした点で意義があると思われる．また，ま綿を引きちぎったような雲，ちりめんじわを呈することもある雲，絹のベールのような雲などと説明されるとおり，これらの雲名の巻を絹に改められたことによって，文字からくる雲のイメージが従来よりもいっそうはっきりするのではなかろうか．

* Yoshihiko Takahashi, 気象研究所